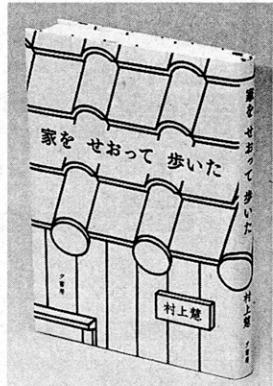


家をせおって歩いた

村上慧著



(夕書房・2160円)

私は定まつたといふに暮らすのが当たり前だと信じ込んでいる。現代社会はそうした暮らし方を前提に組み立てられている。けれども、人類類が定住生活を始めたのはせいぜい1万年前のことであり、数百万年にわたる人類史のごく一部でしかない。

美術家である著者は、東日本大震災を機に、「閉じきつた生活からの脱出」を図る。それが、発泡スチロールで作った家を担いで「移住を生活する」という試みだった。本書は、20代半ばの著者が約1年間にわたって絵を描きながら日本国内を移動した活動記録である。

「歩く」とは、歩いた土地と歩いた距離を、体に刻み付けていくことなんだ」と著者

「家」は、人がひとり横になれるものの、寝返りは打てないほどの小ささだ。屋根にはちゃんと発泡スチロールの瓦があり、ノブの付いたドアや窓、表札も備わっている。推定重量は15kgと、けつこう重い。日が暮れるころには移動した先々で、どこかの敷地に置かせてもらう交渉もしなければならない。

歩いてゆくと、さまざまな出会いがある。家に興味をもった小学生たちが話しかけてくるし、気のいい若者から地域のお祭りに誘われたりもある。ツイッターで見知らぬ人から役立つ情報をもらうことも多い。東北の被災地では、地域に根差して生きる人々の思いと「復興」という名の大事業とのすれに、心を揺さぶられる。

物で目的地へ移動することに慣れ、途中にある空き家やさびれた商店街だけの土地のことは気にも留めない。それは一種の暴力ではないか、という著者の問いかけは重い。

東日本大震災とそれに続く原発事故に、これまでの生活や社会のあり方を変えなければ、と思った人は少なくない。しかし、實際には驚くべき速さで元の日常生活に戻ってきた。本書は、そのことに対する違和感や痛みを突きつける。背負っているものの重みを意識しながら、自分の足で移動すること——瑞々しい思索に満ちた一冊は、読む度に新しい。

(歌人 松村由利子)

むらかみ・さとし 美術家。1988年東京都生まれ。武蔵野美術大学卒。